

いし ころ 遊 び 石 塊

曾 和 光 代

石を蹴りながら家路につく、綺麗なすべすべした石を見つければ宝物のように小箱や、草むらに隠しておいて次に、皆んなと遊ぶ時までとっておく。瓦の欠けらを見つけては、友達の瓦石に負けないように、寺や神社の延石で歪な面を磨き上げ、つるつるした瓦石に仕上げる競争をした思い出等は、誰もがもつ子供時分の思い出ではないだろうか。

近頃はほとんどの道路が舗装され、ちょっとした路地もタイルや、コンクリートで化粧されている。そのせいか石塊もあまりみかけなくなってしまったが、公園や道路に、チョークや蠟石で石けりの図が書かれ、遊んだ跡が残っていたり、学校のグラウンドで放課後、石けりをしているのを時々みかける。

石けり遊びの図を見ると、顔が自然に綻んでくる。子供のいないその場所で、『ケンパ、ケンパ、ケンケンパ』、等口遊みながら心は跳んでいる。

石塊は既製の玩具にはない、おもしろい遊び道具の一つである。現代でもこの遊びは十分に、幼い年齢から高学年まで一緒に楽しめる遊びである。

鬼遊び同様素朴で遊び方によっては、運動量の多い遊びである。子供達が成長してゆく段階で経る多くある遊びの中で昔から変らぬ遊びの一つに思われる。

石遊びの種類

I 比較的運動量は少ないが技等を競い合うもの。

① 石くずし

遊び方

小石を山のように積み上げ、順番にこの小石を1こずつ取ってゆく、もし取る時に、他の石が少しも動かなかった場合は、続けて取る事が出来るが、少しでも他の石が動けば次の者に番を譲る。沢山石を取った者が勝となる。これは砂等でもよくやられる。

② 石積み

遊び方

お互に同数の石を持って集り、順番に一こずつ石を積み上げる。もし崩れなかったら続けて積む事が出来る。崩れた場合はその石は無効となる。次の者に番を譲る。早く自分の持っている石を積み上げてしまった者の勝となる。

③ 石数当て

遊び方

お互に小石を持ちよって、石をどこか、握りしめ、「石なんぼ」、「石なんこ」等、言って、友達同志拳の中にある石を当てっこする。

あてた者はその石をもらえ。多くの石を所有した者が勝となる。又、当てた数で勝と決める場合もある。

④ 石弾き

「おはじき」と同じ遊び方である。今のような綺麗なガラスのはじき玉とちがい昔は小石を弾いて遊んだ事からこの称呼があったものと解される。近代になっては^{※1}「きさご」を用いて遊ぶようになった。平安朝の時代には「弾碁」といって、中高に造られた特殊な碁盤の上で、碁石を弾き合う遊びがあった。

遊び方

お互に数を決めて、はじき玉（小石又は、ガラス製のもの。）をだし合う。順番を決めてそれらの弾き玉を一掴みにしてとりはらい、2箇の弾き玉と弾き玉の間を、その何れにも触れないようにして小指の先で線を引き、拇指と食指によって、その一つを弾いて他の1つに当て、首尾よく当たった場合、その弾いた1箇を自分のものにでき、次に同様の事を繰返す。弾いて当てようとし

た玉に当たらなかつたり、他の弾き玉に当たった場合、又は弾いて2箇以上当たった場合は、次の者と交替である。

次の者はそのままこれを受け継いでもよいがもう一度残った弾き玉を一掴みして、はらいなおして始めてもよい。出来るだけ多く自分の物にした方が勝となり、そのまま自分の所有物となる。

これは一般的な遊び方の一例だが他に色々な遊び方もある。机等の台の上で同じ様な事をするが、当てたはじき玉を台の下へ弾き落してしまうと、その玉がもらえる。

※2
その他、青森県西津軽郡木造町の『おっかげおっと』〈石拾い遊び〉は、4、5人の子供達が小石を持ち寄り、まずいくつずつ出すかをきめ、30個位になると順番をきめてから遊びをはじめる。1人が「おっかげおっと」で全部の小石を上へ投げあげ、落ちて来る小石を掴んで横に置く。「此処切っ禁制」で、下に落ちた小石のうち、2個の石の間を指で通し、指で弾いて当てる。当たればその石を拾う。以下同様にして石を拾っていき、多く拾った者が勝ち、指を通すときに石にふれたり失敗すると交替、拾うとき貝を使うこともある。

おっかげおっと、此処切^こって^ご禁^{きん}制^{せい}。

一^えや、二^にや、三^{さん}や、四^しや、五^ごや

六^{ろく}や、七^{しち}や、八^{はち}や、九^くやの十^{じゅう}。

と、記されている。

「おっかげおっと……」と歌いながら石を拾い、子供達が弾いて当てた石を自分の領内へ集めてゆく。これ等も石拾い遊びにはちがいないが、集めた石を一掴みにして上へ投げてはらう、落ちた石を弾いて当てる。やはり、石弾き遊びである。

⑤ 石投子 (いしなご)

この遊びは遊戯大事典によれば、平安朝以前から女兒の間に行なわれていたもので、現在も行なわれているお手玉の前身であって、小石を以って遊んだことから、石投子、石投、石子、石投子取、石なんご、擲石、ひふ、等とよばれ

ていたそうである。

この石投子遊びについては、第61代朱雀天皇の承平年間に、源順によっても
のされた『和名類聚抄』。第68代後一条天皇の長元7年頃、作者不詳の『栄華
物語』月の巻。又同時代に成る『拾遺集』十八賀。『赤染衛門家集』。第74代
鳥羽天皇が、保安4年に譲位せられてから、北面の武士として親寵を蒙った佐
藤義清、西行法師がものした、『山家集』。第118代後桃園天皇の安永年間に、
谷川士清ことすがのものした『和訓栞』。第119代光格天皇の文化11年村田春海の著、
『笠志船物語』。第121代孝明天皇の嘉永6年に刊行された喜田川守貞の『守貞
漫稿』。等に、「石投子」「石投子取り」「石などり」の称呼に関する事が記
せられている。

『守貞漫稿』には「いしなごと云、今京阪地方にてはいしなごとりと云、女
童集り各々小石或二、或三つを集め一童持之席上に抛蒔き其数石うち一石を
取り、是を尺ばかり或は二尺三尺になげ上げ、落来る間に、二石をとりて後、
落る石を受け席上の石とり尽せば再蒔散之、今度は三石つづけて取て落る石を
受、三四回准之、七回に至り畢とす。半に受過る時は次の童に譲る云々」とか
かかれている。

これに書かれている遊び方は、私達が子供の頃に遊んだ遊び方とまったく変
らず、私の祖母も、母もそうして遊び、私も遊び次の時代へと受け継がれて来
た遊びの一つである。

我々の場合、おじゃみ（布で袋をつくり、大豆、小豆、小石等の中に入れた
物。）なるもので同じ遊びをした。もちろん、おじゃみを持ちあわせない時は
小石でよくやったものである。片手で握れるぐらいのおじゃみを5～8箇ぐら
らい小袋に入れて学校に持ってゆき、休み時間に仲間を作り競争した思い出が
ある。

遊び方 1.

5～6箇の手玉（石あるいは、おじゃみ）をもちい、その中の1つを軽く上
に投げ、それが落ちてくるまに、手元にある手玉を1つ拾い、落下してくる手

玉も素早く擱んで、拾った手玉を下へ落す。又、同じ事を2つ目の手玉、3つ目、4つ目と、とってゆく。これは歌にあわせて遊ぶのだが、地方によって文句もちがう。子供の頃歌ったうたを思い出して例えてみると。

1. おさら	2. おさら	3. おさら
おひとつ	おつかみ	おはさみ
おひとつ	おつかみ	おはさみ
おひとつ	おつかみ	おはさみ
おひとつ	おつかみ	おはさみ
おとして	おとして	おとして
おさら	おさら	おさら

(大阪府吹田市)

2番の「おつかみ…」になると、右手で拾った手玉を素早く左手に擱ませるのである。「おはさみ…」になると、右手で拾い左手の指の間へ手玉を一つずつ挟んでゆく。この後、左手の平に手玉を順に乗せたり、左手の親指と人差指を床につけ、そのアーチ状になった指の間を素早く手玉をくぐらせてゆく。等、だんだんと難しくなってゆく。投げ上げた、手玉が落ちてくるまでに、それらの動作が出来なければ次の者に番を譲る。

遊び方 2

2つないし、3つの手玉を使うが、最初は、両手で手玉を2つつかい、右と左に1箇所ずつ手玉をもち右手の手玉を軽く上にほうり投げる。手玉が落ちて来るまでに左手の手玉を右手に移し、素早く落下してくる手玉を左手で擱み右手に移した手玉を又上へ投げる。手玉を落さないで上手に続けてやる。これも地方により色々なお手玉歌がある。歌が終るまで続ける。きめられた数をかぞえながらやる。それが出来れば手玉は3つ、4つと増えてゆく。両手が済むと、片手で2箇の手玉を上手に回転させながら投げ上げる。これもだんだんと手玉の数がふえてゆく。次から次へと難しい段階へと進んでゆくのを競う。

⑥ 石切り

遊び方

瓦の欠片や扁平な小石等を、親指と人差指との間に縦につかみ、中指以下は握りしめてその瓦や小石を背面から支えるようにし、水面すれすれに向かって投げてやると、平石は恰も飛鳥の様に水面に触れては離れ、離れては触れ、点々として水面に波紋を描いて行く。その触れつ離れつ水を切って行く回数が多いことを楽しむ。

これも子供の頃、河原へ行き平石を見つけ、とばしっこをした。一重とばし二重とばしと、数を決め、投げ方を色々と自分なりに考えたものだ。今でも河原へゆくと子供達がとばしているのを見かける。

これも歴史が古い。「打瓦」(ちょうま)と呼ばれ、第120代仁孝天皇の文化14年に、喜多村信節がものした『瓦礫雑考』の中に、「今小児の戯に欠瓦、または薄く扁なる小石、介殻などを拾ひとつて、水面にむかひ横ざまに擲てば、水の上を縫ふが如く出沒して飛ゆくを、ちょうまやるといふ。今按に、ちょうまは打瓦の誤なるべし、孟陽擲瓦は蒙求に出て、人にしることなればいふに及ばず……………(遊戯大事典より)

と書かれてあり古くより行われていた事は確かである。

⑦ 火打ち石遊び

これは別に勝負や技を競うというほどのものではないが、河原で火打ち石なるものをさがすのである。白くて艶のあるすき透る感じの石を見つけだし、石と石を摩り合せて、火花が出るのを確かめる。友達同志石をさがすのに一苦労である。

京都に、(火打ち石遊び)^{※3}『火で一で一』という遊びがある。家の周りの石垣の中に、光ったような石を見つけだし、別の石でたたき火花が出るのを楽しむ。これには歌がある。

火で一で一 かぼちゃ

ばば火たけ、もう日が暮れた

おやま
女郎もう晩や 灯ともせ

この歌を大声でうたいながら、昼間に探しておいた自分の石をたたくそうである。夕闇の中でパッパッと散る火花を競い合うのかもしれない。よく火花のでる石でも見つけたなら宝物でも見つけたように、心が弾んだものであった。石さがしも楽しい子供達同志のふれあいである。

※1 「きさご」〔細螺・喜佐古・扁螺〕

原始腹足目の巻貝。殻は小形で多数の放射火焰状の淡褐色の斑があり、厚く固い。殻をおはじきなどの遊戯に使う。シタダミ。キシヤゴ。ゼゼガイ。イシャラガイ。（広辞苑より）

※2 日本わらべ歌全集2上

「青森のわらべ歌」 著者 工藤健一 柳原書店
P. 106『おっかげおっと』（西津軽郡木造町）より抜萃。

※3 日本わらべ歌全集15

「京都のわらべ歌」 著者 高橋美智子 柳原書店
P. 202『火で一で一』（京都府北桑田郡美山町野添）より引用。

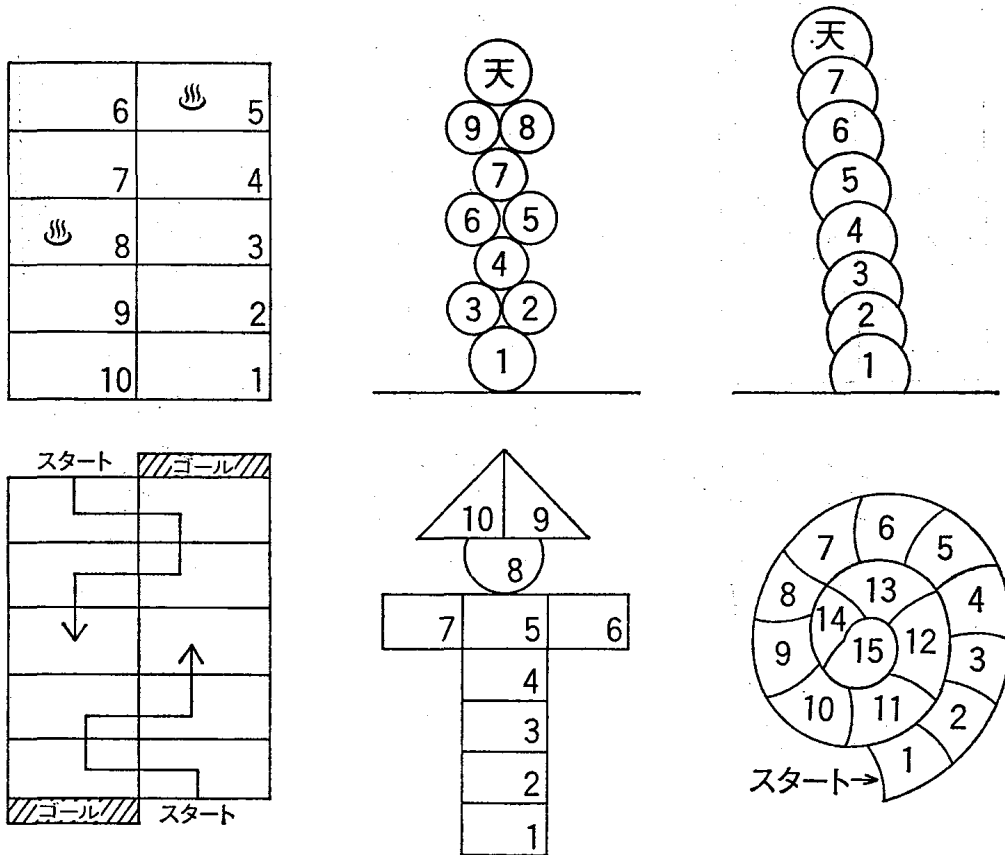
Ⅱ 運動量の多いもの。

① 石けり遊び

石塊遊びの中で一番運動量が多い遊びである。石けりは世界中どの国でも古くから行なわれている伝承遊戯である。日本にはヨーロッパから明治になって移入されたものらしい。外国の場合、古代ギリシアの宗教的シンボルから源を発しているといわれている。迷路、迷宮をつくり最後の区画をパラダイス、栄光等と名づけて遊ぶ。日本でも、色々のマークをつけて、その場所では休む事ができるのもある。目標の所へ小石をなげる。片足や両足で区画からはずれずにとぶ。これらは基本的なルールであるが、子供達同志で、石のほり方で足を曲げない、目をつむって投げる等、ルールを厳しくして遊ぶ。図形も色々あり、地域や、時代によりさまざまに考案工夫され、かかし、足の形、やっこさん等、その上色々とにぎやかなマーク入りもある。

平たい形の良い石をみつけては、大事にとっておき、日が暮れるまで町内で石けり遊びをよくやったものである。

遊び方 1 (石けり)

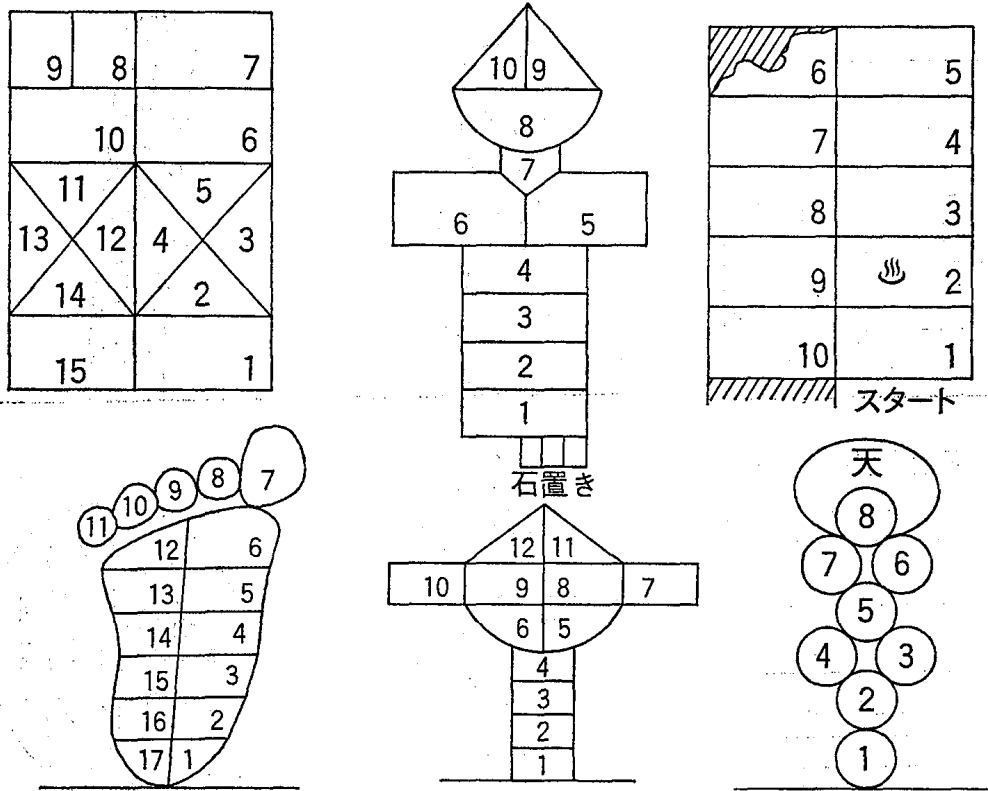


図A 石けりの図形色々

- 1) 図Aのような図形を地面にかく。
- 2) 第1区画に石をなげ入れる。
- 3) 片足でこの石を第2区画へ、次に第3区画へと蹴り進んで最終区画に至る。
- 4) 区画から石ができれば、その前の区画に石を置き次の者と交替。
- 5) 最終区画まで投げ入れ、蹴り進むを行い。
一番に最終区画に至達した者が勝となる。

これが石けり遊びの基本形ではないかと思われる。

遊び方 2 (ケンパ)



図B ケンパの図形色々

これはケンパ等と呼ばれている遊びである。

- 1) 図Bのような図形を地面にかく。
- 2) 1区画に石を投げ入れる。
- 3) 石の入った所はとばして跳ぶ。第2, 第3区画へと片足跳び(ケン)又は両足跳び(パー)で最終区画までゆきもどって来る。
- 4) もどりぎわに1区画の石を拾う。
- 5) 次に第2区画へ投げ入れ, 同じ事を繰り返す。
- 6) 最終区画まで失敗せずに早く至達した者が勝となる。

ケンパは色々な遊び方があり, 図形によりケンパー, ケンパー, ケン, ケ

ン、パー等と拍子が変わり、子供達の間で、ルールの変形が見られ、図形も変わる。

そのおもしろい例を2つほど上げてみると。

(例1) —ゴジカメー

- 1) 右図を地面にかく。
- 2) 石なしで、1人ずつケン、ケン、ケン、パー、ケン、ケン、ゴジカメの所はとばす。ケン、パーで参加者全員は1周する。
- 3) 順番を決めて区画1より石を蹴りながら進む。
- 4) 4区画はパーで石を拾い5区画へ手で投げ入れる。
- 5) 又、5区画より蹴り初め6区画ではゴの字の所へ上手に蹴り入れる。うまく入れば、7、8区画へと進む。(2周)
- 6) 返りは6区画の所で片足まま、ゴの区画に入った石を拾って、石をもったまま元へ、もどる。(3周)
- 7) 初めから石を蹴りながら進み、6区画より今度はジの区画へ石を蹴り入れる。うまく入れば7、8区画へと進む。(4周)
- 8) 今度はうす目をあけて7)と同じ事をする。(5周)
- 9) 初めより蹴り進み力の区画に蹴り入れる。(6周)
- 10) 返りは片目をつむったまま石を拾う。(7周)
- 11) 次はメの区画に石を蹴り入れ、返りは両目をとじたまま石を拾う。(8、9周)
- 12) 10周目は石を持ったまま進み6区画で石を7区画に投げ入れ、うまく入れば6区画から7区画へ跳んで、その石を8へと蹴り出す。うまく蹴り出したら終りである。

5		4
6		3
メ	ジ	2
ゴ	カ	
7		1
8		スタート

図C ゴジカメ

早く10周した者が勝となる。

13) 両目を閉じた時に足が線にかかったり、石が線上にひっかかったり、区画からとび出た場合は次の者と交替。

(例2) —ホームランケンパー

グループ対抗で (A子, B子) 対 (C子, D子) とする。

1) 図Dの形を地面にかく。

2) A子, B子から初めた場合

2人は①区画に立ち石を②区画に投げ入れる。

3) A子から②区画に入った石を片足で④区画まで一蹴りする。③区画は両足を広げ

(パー) となり, ④区画の石を片足で⑤⑥⑦区画へと蹴り進んでゆく。

4) ⑦区画から⑨区画, 又は⑩区画めざして蹴る。⑨に入れば「ヒット」⑩に入れば「ホームラン」である。

5) ⑨区画に入れば, ⑧区画で「パー」をして⑨区画の石を一蹴りで⑩区画に入れる。入れば片足で(ケンケン) ※印の所に行き, 両足立ちで後向きで⑩区画に入った石を拾う。

6) 拾えたら両足跳びで①区画にもどる。

7) B子も同じ事をする。

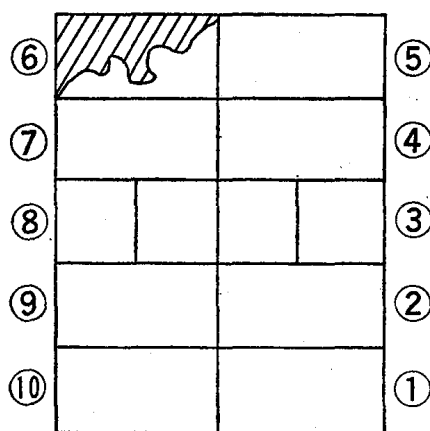
8) 「ホームラン」は2点, 「ヒット」は1点, 2人のたした数だけ前へ進める。例えば, 2人とも「ホームラン」の場合は, ①区画より⑤区画へ石を投げ入れる事が出来る。

9) どちらかが失敗しても片方が成功すればゲームは続けられる。

両方が失敗すれば, C子, D子と交替ということになる。

10) このようにして, ⑩区画までゆく。

⑩までゆけば, 後向きに立ったまま石を投げ入れ, 石が入った区画を自分達の障地とする。その中では休み, , 歩いたりする事が出来る。☁マー



※
図D ホームランケンパー

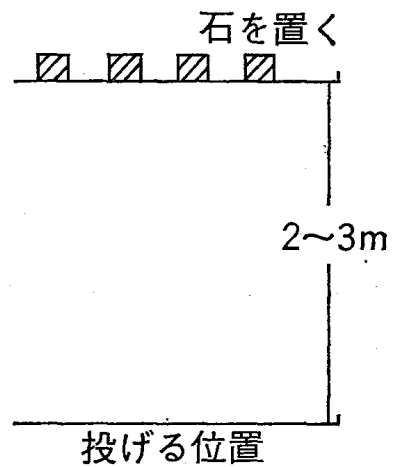
ク等の印を入れておいたりする。

11) ⑥区画の斜線部分に石を入れる事は出来ない。入ればアウトである。

以上、これらの遊びは、石けりの原形とケンパが入りまじったものである。その上、目を閉じて進んだり、入ってはならぬ、斜線部分があったり、子供達同志が決めたルールが段々と難度を増してくる、なかなかおもしろい遊びである。

遊び方 3 (石あて)

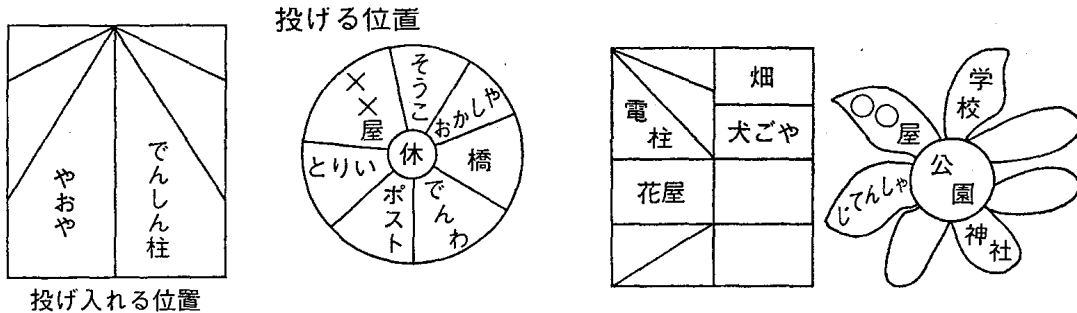
- 1) 一直線上に、それぞれの石を立てて並べる。(瓦の欠けらが良い。)
- 2) 順番を決めて、2~3m位の位置から1人ずつ並べてある石を倒してゆく。
- 3) 全部倒せば今度は自分の石を足にはさんで両足跳びで並べてある石を倒しにゆく。
- 4) 次は膝にはさみ同じ事をする。
- 5) 肩や頭に石をのせて歩きながら進み、並べてある石を倒す。
- 6) それが済めば今度は後向きになり2)~5)までをやる。
- 7) 対抗ゲーム式にお互の陣にある石を倒してゆくという遊び方もできる。



図E 石あて

簡単そうでなかなか当たらない。倒されにくくどっしりと、しかも当てやすい瓦石を見つけるのが勝利への道である。

遊び方 4 (石なげ)



図F 石なげの図形色々

これは石をつかった鬼遊びの種類でもある。

- 1) 図Fの図形を地面にかく。
- 2) 鬼を決め、鬼になった者は、投げ入れ線より石を自分の思う所へ投げ入れる。(蹴り入れる場合もある。)
- 3) もしそれがポストであれば、全員がポストまで走ってゆきポストにタッチして、元の位置にもどってくる。
- 4) 一番おそかった者が次の鬼になる。
- 5) 3)番まで同じであるが、鬼以外の者は素早く隠れ、鬼は帰ったらすぐに、決められた数をかぞえ隠れた者をさがす。初めに見つかった者が次の鬼となる。これは、かくれんぼも一緒に入っている。

タッチしにゆく場所の遠近が微妙にからみあい、どこへ走らされるか鬼の腕一つにかかっているのがおもしろい。

以上、石けり遊びを上げてみたが、

ただ単に石けりといっても、色々な遊び方がある。子供達の間で多くの種類へと発達を遂げてきた。子供達の住んでいる環境でルールも変わってくる事も確かである。

石けり遊びの魅力なるものは、どんな所に、あるのだろうか、書きだしてみると次のようではないか。

1. 目標地点、適切な場所に正確に投げ入れる。
2. 片足跳びだけでなく、石を蹴りながら、又、障害を上手にさけながら、跳び進む挑戦意欲がわいてくる。(バランス、脚力も必要となり自然に養われる。)
3. 一定のコースを終えれば、次から次へと状況が常に変化し、難度を増してくる。
4. 片足で跳ぶ等、脚力の必要さもあるが、そう年令左にこだわらずに、低学年ならそれなりのコースに挑戦すれば良いので、高学年と低学年一緒になって遊べる。

以上が石けり遊びの魅力なるものではないかと思われる。

私自身も子供の頃には片足跳びが続かずに足を地面に着いてしまい、年上の子に負けてもらおうと、次は気をつけて跳ばなければ……と思い頑張ったものである。

この石けり遊びも鬼遊び同様、体力的に個人差があったり、又、年令的に差があったりしても、子供達は遊びの場で、自分の体力の限界までを無理なく頑張る、自然に自分の体力作りの鍛練の機会を持つ事になる。足の平衡感覚、的確、巧み性等、全身運動にもなっている。

遊びのレポートの中で、ある学生が、石けり遊びについて、簡単そうだが実際は、なにになにどうして、目的地まで行くのに一苦労。ピョン、ピョンと元へもどるのが一苦労。目的の場所へ石を投げるのが一苦労。この遊びは半永久的に続く遊びとあってよく、1日中でもあきたらずにやった。

石のえらび方については、上手に石を蹴る技術もさることながら、石そのものに大きく影響する。まず形は、ころ、ころ、ころがっていないように、平べったい物が良く、大きすぎず、小さすぎず、又、摩擦も有りすぎず、無すぎず、の物を選ぶ。なおかつ色、柄が美しければ申しぶんなし。

このために石拾いも楽しい遊びの一つであつたらしい。

石拾いについては、仲間と海へさがしにゆき、苦労してさがしあてた石を使わない時は秘密の場所に隠しておく。ゴミ焼き場の裏だったり、木の根っこだったりする。誰も知らない所に大事な物を隠しているというのは、何ともむずむずとうれしいものだ。等と、なかなかおもしろい事を書いている。

正にその通りである。これこそ、子供の心ではないかと思う。親の知らない秘密を持つ、それでいて危険なものではない、子供だけの世界である。

以上石遊びの種類を色々まとめてみたが、石遊びも昔から遊びが変わらない伝承遊びの一つであろう。そこらに、ころがっている石塊が楽しい素朴な遊びへと導いてくれる。

遊び場の少なくなった都会ではあまり、このような遊びをしている子供を見

かけなくなったが、色々な稽古ごとで放課後もつぶれてしまう現代子にも伝えておきたい遊びである。

参 考 文 献

1. 体育大辞典：今村嘉雄他 (不昧堂)
2. 遊戯大辞典：中島 海 (不昧堂)
3. 私の子供文化：加古里子 (あすなろ書房)
4. 健康をもとめて：山野三嗣 (不昧堂新書)
5. 楽しい遊び：有木昭久；湯浅とんぼ (フレーベル新書4, 5)
6. うんどうゲーム：加藤忠之 (小学館)
7. 日本わらべ歌全集2上「青森のわらべ歌」工藤健一 (柳原書店)
8. 日本わらべ歌全集15「京都のわらべ歌」高橋美智子 (柳原書店)
9. 日本わらべ歌全集16「大阪のわらべ歌」右田伊佐雄 (柳原書店)
10. 日本わらべ歌全集19上「広島のわらべ歌」原田宏司 (柳原書店)
11. 日本わらべ歌全集22「徳島，高知のわらべ歌」
園尾正夫，近森敏夫，吉良長幸 (柳原書店)
12. 日本わらべ歌全集24「佐賀，長崎のわらべ歌」
福岡 博，黒島宏泰 (柳原書店)
13. 日本わらべ歌全集25 上村てる緒，上原優子，高橋政秋 (柳原書店)